岐阜・長野・千葉(チバニアン)調査・取材行

【アイヌ民族の痕跡・中央構造線露頭・地磁気の逆転地層】

2022年9月6日～10日

撮影 Y.K

2022年9月6日－10日、メンバー8名が岐阜・長野・千葉(チバニアン)において、アイヌ民族の痕跡・中央構造線露頭・地磁気の逆転地層に関する調査・取材を実施した。

9／6（火）晴

☆飛騨高山まちの博物館　☆飛騨民族考古館

★10：00→11：50

ピーチMM462便【新歳空港(10：00発)→中部セントレア国際空港(11：50着)】にて、空港で合流したメンバー4名を加えた8名が今にも雨が降り出しそうな天候の中、中部セントレア国際空港に向けて出発した。

取材予定地の天候は台風の影響を受けてほぼ一週間〝雨か曇り〟である。

ご多分に漏れず着陸30分前の機内アナウンスでは〝到着地の天候は雨〟とのこと、少し気が重い。

到着空港の滑走路はアナウンス通り雨で濡れてはいたが、空港から一歩でると太陽が燦々と降り注ぐ青空には正直驚いた。

9月に入ったとはいえこちらは連日30度を越す夏日が続き暑い。

☆12：40　早々にレンタカー2台に分乗し各地域の高速道路(知多半島道路→名神→東海北陸道)経由で本日の目的地飛騨高山へ向けて出発。

セントレア東ICに上がり北上、途中サービスエリアで昼食をとる。

北上を続け飛騨高山ICを下り、高山市街の「飛騨高山まちの博物館」を目指す。

★15：50　約200kmを走行し、同市の観光スポットである「古い町並み」に到着。

前回(2016/8) の取材では8月半ばの観光シーズンと重なり「古い町並み」は多くの観光客で賑わっていたが、9月はオフシーズンなのか人影もまばらであった。

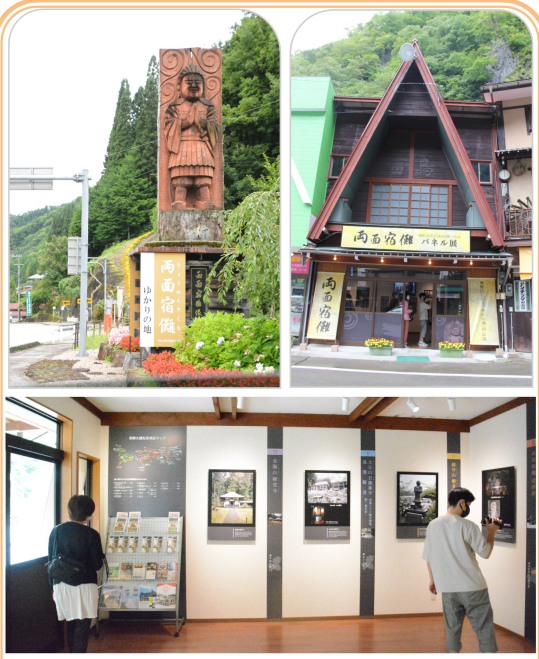
隣接する「飛騨高山まちの博物館(岐阜県高山

図6　御物石器　“アイヌ聖典”に二重の明光・三重の明光と記された聖なる文様を刻む
（2016年撮影）　（飛騨民族考古館所蔵）

市上一之町）」へ到着。
館内には高山祭のユネスコ無形文化遺産が多く展示品されていた。
お目当ての「裂孔浅鉢土器」を探すが見当たらない。
「裂孔浅鉢土器」に限らず館内には、以前設けられていた考古資料のコーナーが無くなっている。
受付にて確認したところ、現在は高山祭りの文化遺産に力を入れている関係上、展示品の総入れ替えを行ったとのこと。
期待してきた「裂孔浅鉢土器」の取材もできず何とも意気消沈である。
☆16：40　博物館を出て徒歩で数分の「飛騨民族考古館」へと向かう。

ところが悪い事は重なるもので2年前からの新型コロナウイルスの影響か、あろうことか「飛騨民族考古館」は閉館し、見学すら叶わない状況であった。
何れの資料館も前回取材していたとは言え、事前調査を怠っていた私たちの完全なる失態である。
二度とこのようなことを繰り返さぬよう深く肝に銘じ「古い町並み」を後にする。
気を取り直して高山駅前の本日の宿泊先スパホテルアルピナ飛騨高山へと向かう。

9月7日(水)晴
☆両面宿儺　☆大王わさび農場　☆穂高神社
☆有明神社＆魏石鬼岩窟　☆穂高郷土資料館
☆八面大王足湯
★9：00　早朝より降り続いていた雨もホテルを出るころには上がり青空が見えている。
R158経由で最初の取材地である長野県安曇野市・大王わさび農場へと向かう。
途中、高山市丹生川町付近にて「飛騨大鍾乳洞」と「両面宿儺ゆかりの地」と書かれた立看板が目に入り急遽立ち寄ることとした。
看板を左折し坂道を約１km進むと左側に両面宿儺の遥拝所が設けられている。
その脇の階段を280段上ると宿儺が立て籠った両面窟があるが、現在は危険に付き通行禁止となっていた。
さらに坂道を進むと広い駐車場がある。
左側奥には飛騨大鍾乳洞、右側には大橋コレクション、その一角に飛騨に伝わる両面宿儺の伝承・説明パネルや写真を展示する「両面宿儺パネル展示館」がオープンしていた。
日本書紀では『奇怪な容貌の持ち主として描かれた両面宿儺(リョウメンスクナ)は、ヤマ



両面宿儺パネル展示館

両面窟への登山脇の両面宿儺遥拝所

大王わさび農場

ト朝廷(仁徳天皇)に帰順せず悪逆非道を働いたが故に、5世紀頃天皇の命により征伐した』と記述している。
しかし、丹生川村史には『飛騨を統率し善政により住民に拝められていた』と日本書紀とは正反対の人物として記述されている。
ヤマトは土着の原住民を「土蜘蛛・サエキ・国栖･ヤツカハギ・エミシ」など様々な言葉を持って蔑視している。
同じくここ飛騨においても、人間の世界を死守するべくヤマトの侵略に対して最後まで抵抗した英傑の人「両面宿儺」をヤマトは〝奇怪な様相の人物〟として蔑視しているのである。
時間も押しており早々に展示館の取材を終えてR158を東進、北アルプスの難関を通過して次の目的地「大王ワサビ農場」へと車を走らせる。

★11：00　R158→長野自動車道(松本IC→安曇野IC)を経由して大王ワサビ農場(長野県安曇野市穂高）へ到着。
半数のメンバーは二度目の訪問である。
わさび農場として約4万5,000坪を誇る敷地は日本一とのこと。
広大な敷地の中に「大王神社、わさび田の小道、大王窟、レストラン」などの21箇所の散策スポットが設けられている。

かつて洪水で流された「八面大王(魏石鬼八面大王)」の棺を納めた場所に大王神社が建ち、正面左右には大わらじが飾られている。
解説によると「大王神社」に奉納された正面の「大わらじ」は、巨体の持ち主である八面大王を象徴しているとか。
わさび田を流れる湧水の万水川に掛る橋を渡ると宮城の岩窟を真似た「大王窟」のレプリカが大きな口を開けていた。
中を見学し「大王窟」の上に上がり、そこからスタートする散策路を巡る。
敷地が広く30度を越す気温のせいか少々バテ気味だ。
「大王農場」がある安曇野の地名は、福岡県の安曇族に由来し古代において安曇族がこの地に移り住んだとの考古学者の共通した見解である。
また、八面大王は「ヤメノオオキミ」とも読めることから、太陽神とのコンタクトからその地に誕生した九州の石人・石馬文化に象徴される太陽王国をヤマトの侵略の魔の手から死守するべく、約1年以上にわたり死闘を繰り広げた「筑紫の君磐井」の子「葛子」との関係が示唆される。
古文献によると、「八面大王」は非道を働く盗賊集団の長として8世紀末に天皇の命で討たれたという。
しかし、地元では、「両面宿儺」同様に、ヤ

魏石鬼八面大王の胴体を安置する大王神社と大王窟の２基のレプリカ

マトの圧政から住民を守った英雄として語り継がれている。

安曇市には「足塚」「耳塚」「胴体」が、松本市には「首塚である飯塚」が存在している。

「八面大王」の復活を恐れたヤマトが遺体をバラバラにして埋めたその痕跡である。

同様の伝承は、岩手県三陸町「越喜来湾」一帯にも存在する。

☆13：15　農場内のレストランでの昼食後、R309経由で穂高神社へと向かう。

※魏石鬼八面大王については、Aerospace UFO News 2016.6 VOL35-1 2019.5 VOL36-1 を参照のこと

★13：35　穂高神社に到着(安曇野市穂高）。

鳥居をくぐり抜けると境内の神楽殿の横に樹齢500年以上と推定される孝養杉の大木が目を引く。

静寂に包まれた広い境内を進むと船に乗る安曇連比羅夫(アヅミノムラジヒラフ)のブロンズ像が建っている。

安曇連比羅夫は同神社の若宮社の祭神である。

663年、ヤマトの前将軍として百済の救援に赴き戦死したその功績と、この地を開拓した安曇一族の英雄として祀られたという。

日本書紀のこの記録はヤマトの出自が百済であることを物語っているのである。

ヤマトが安曇野の地に侵攻する以前の7世紀という年代的判断から、この「安曇連比羅夫」が安曇野の地とは関係のない人物であり、不明とされる穂高神社の創建は「八面大王」の没後と推察された。

さらに、その奥には穂高神社資料館(御船會舘)があるが生憎とこの日は休館であった。

同資料館には、9月26―27日に開催の「お船祭り」に使用される船型の山車が納められている。

穂高神社

安曇連比羅夫のブロンズ像

上・穂高神社資料館（御船會舘）
下・勇壮なお船祭りに使用された船

安曇野地区と松本地区では大小5隻の船を曳きまわして豪快にぶつけあう勇壮な祭りが行われている。
日本書紀には、磐井の実子〝葛子〟は糟谷屯倉(安曇野)を治めていたと記録されている。
九州の安曇族が海洋族であることと安曇族が磐井海軍であったことを「お船祭り」が示唆しているのである。
☆13：50　穂高神社を後にR308号→R327号を経由して次の目的地「魏石鬼岩窟」手前の有明神社へと向かう。

★14：10　有明神社の駐車場へ到着(安曇野市穂高有明宮城)。
駐車場に車を停め、神社の鳥居をくぐり抜けて進むと正福寺の不動尊が見えてきた。
その右側から細い山道を進むと「魏石鬼岩窟」の案内看板がある。
山道の左側には小さな石仏が道案内でもするかのようにズラリと並び、右側はかなり勾配のきつい斜面だ。
15分ほど歩くと目の前が開け、「八面大王の鎮魂」を目的として巨大な岩の上に建立した正福寺の岩上観音堂がある。
その観音堂脇の坂道を回り込みながら下りると左側に立て看板とその奥に見る者を圧倒する進路を塞ぐかのような巨大な岩との二度目のご対面だ。

★14：30　ヤマトとの戦闘で八面大王が立て籠ったとの伝承がある有明の斜面に造られた「魏石鬼岩窟」へ到着。
岩窟の入口(約１m20 - 30cm四方)には鉄格子が取付けられ真っ暗で中は見えない。
持参した懐中電灯で中を照らし順次観察・撮影する。
中は入口より広く、奥行きは3～4mほどか？
入口付近の両サイドには巨岩を支えるかのような立石が数本ずつ並んでいる。
その奥には厚さ10cm－20cmほどの割石が積上げられ九州発祥の横穴石室を想起した。
「大王窟調査報告書」によると「穂高古墳群

他に例を見ない巨石の古墳・魏石鬼岩窟

正面奥に割石が積まれた横穴石室古墳

有明D－1号墳」と命名された6世紀頃の横穴石室古墳であるという。

安曇族がはるばる九州より移り住んだ証左に他ならない。

「大王窟」の巨岩は数十トン或いは百トンを超えていると想定された。

どのようにして組上げたのか想像すらできない。

地面から岩上観音堂が建つ巨岩のトップまで3～4m以上はありそうだ。

☆15：15　山蚊に悩まされながら来た道を引き返えしR327経由で穂高郷土資料館へ向かう。

穂高郷土資料館

図7　牧地区出土の縄文土器他
（穂高郷土資料館所蔵）

★15:30　穂高郷土資料館に到着（安曇野市穂高有明）。

1Fには同市で昭和30年代頃まで使用した農具・漁具等が展示されている。

2Fには北アルプス山麓の牧地区出土の土偶や、目を見張るような渦巻文様やワラビテ文様を装飾した主に縄文中期の土器など800点あまりが展示されていた。

北海道ではお目に掛れない土器群に圧倒され、各自夢中でカメラのシャッターを押した。

☆16：10　穂高郷土資料館を退館、R25号線沿いの「八面大王の足湯」へ向かう。

★16：20八面大王の足湯へ到着（安曇野市）。

八面大王の足湯

前回(2016年8月)訪れた時と足湯の場所が移動している。
移築したとのことで周りが公園のように整備され、足湯が道路面に設けられていた。
「八面大王伝説」に因んだ無料の癒しのスポットとして平成30年にリニューアルオープンしたとのこと。
観光客に交じり足を浸して、つかの間の余韻に浸る。
地元民や観光客に「八面大王」の真実が少しでも多く伝わることを願って本日の日程を終了した。
☆16：35本日の宿泊先「ホテルルートインコート安曇野市豊科」へと向かう。

9月8日(木)晴
☆長野市立博物館　☆大室古墳　☆八丁鎧古墳　☆筑摩神社　☆松本城
★9：00　夜中から降り続いていた雨もホテルを出るころには上がり青空が出ている。
宿泊先を出発、本日最初の訪問先長野市立博物館へと向かう。
長野自動車道(安曇野IC→更埴JCT)→上越自動車道(長野IC)→R35）経由で長野市街へ。
★10：00　長野市立博物館へ到着(長野市小島田町）。
綺麗に整備された同博物館は広大な川中島古戦場史跡公園内に建っている。
イナウ(削り花・削りかけ)の収蔵が確認されていることから事前に取材のアポを取っている。
受付にて来訪を告げ、担当者と挨拶を交わす。
2名が別室にてイナウの取材に当たり、他のメンバーは館内を取材する。
ここは長野盆地の歴史と生活をテーマとした博物館で、１F展示室では化石や県内で発掘された挙手人面土器（複製1500年前ごろ）など、比較的新しい年代（弥生時代後期）の土器を展示していた。

長野市立博物館

館内の展示土器

図8　削り花・ゴイワイボウ・セイノカミに供える花　　(長野市立博物館所蔵)

2Ｆ展示室では歴史や文化を紹介している。
☆11：00　長野市立博物館を退館、積石塚で有名な大室古墳群へと向かう。

★11：30　R18→R445→R382→千曲川を渡り→R403経由で「大室古墳館」・「大室積石塚古墳群」に到着（長野市松代町大室）。
Ｒ403の途中で右折し上越自動車道をくぐると、そこから駐車場までは登り坂でその両サイドに今までみたこともない積石塚古墳が並ぶ。
千曲川の東に面した奇妙山の尾根と尾根に挟まれた谷には5つの支群に分けられた積石塚群がある。
総数約500基を超える日本最大の積石塚は、古墳時代（5―8世紀）に朝鮮系渡来人が築造したと専門家はいうが、古墳からの出土物も含めこの地域周辺には、同時代の渡来系の痕跡は無く、朝鮮語も伝わってはいない。
同古墳出土の土器の文様と見島ジーコンポ積石塚古墳（山口県）出土の土器文様とが極めて類似しており、蝦夷のアイヌをヤマトの侵略から救援した粛慎（シュクシンまたはミシハセ）の可能性が考えられた。
或いはフゴッペ及び手宮洞窟の主であったアムール川流域の少数民族かもしれない。
駐車場から眼下を見下ろすと長野市内が見渡せ、かなり高い位置まで登って来たことがわかる。
史跡入口にそびえる大室古墳群最大の244号墳をはじめ、古墳館までには5基の古墳が点在していた。
別名将軍塚とも呼ばれている244号墳は、周溝を含む直径約30m・高さ約8mの円墳で見事な存在感を見せている。
階段を上がりさらに上の古墳館に向かう。
エントランスには大室古墳群の史跡を再現した模型があり、中に進むと古墳群の特徴や長野市内の古墳に関する展示がなされていたが無人である。
大室古墳館を退館しスギやカラマツがうっそ

大室積石塚古墳群と古墳館（全景・内部）
244号墳（中央・約30m×8mの円墳）

うと生い茂り車のユーターンさえも難しい林道を進むと左右の林のあちこちに積石塚古墳が見えてきた。
季節的に雑草が繁茂する時期でもあり、おまけにジメジメと足場が悪く、また石が多い林の中を歩くのは一苦労だ。
ここ大室古墳は積石塚が古墳群全体の8割を占め、日本全国でも約40例の発見である。
「合掌形石室」26基が確認されている。
原形が崩れた「合掌形石室」もあったが全国的には珍しい構造を持つ古墳である。
☆12：40　古代の人々はどのような意図のもとに、かくも多くの「積石塚」や「合掌形石室」を築造したのだろうかと思いを巡らせつつ「大室積石塚古墳群」を後にして「八丁鎧塚古墳」へ向かう。

★13：20　R403→R58経由で「八丁鎧塚古墳」に到着（須坂市八町）。
途中、パラパラと降りだした雨が車のフロントガラスを濡らす。
雨脚が強くなるかと思われたが到着間際にはその雨もあがった。
「八丁鎧塚古墳」は上信越自動車道・須坂長野東ICから車で約10分のぶどうやりんごなどの果樹園に囲まれた斜面上にあり、40基ほどの積石塚で構成される鮎川古墳群の中核的存在だ。
「八丁鎧塚古墳」は6基で一群をなし横並びの1号墳・2号墳は積石塚として東日本最大・最古級の古墳である。
駐車場の階段を上がると同古墳が全景を現す。
〝何という迫力だろう〟そう思ったのは私だけだろうか。
古墳を巡ると1号墳と2号墳間に石棺状のものが見える。
1号墳、2号墳共に頂上には石柱が建っている。

上　八丁鎧塚古墳の展望台から全景を望む
中央　八丁鎧塚1号墳
下　八丁鎧塚2号墳

現地の説明板によると八丁鎧塚古墳は『鮎川古墳群では最上流に位置し、1号墳(4世紀後半)・2号墳(5世紀後半)・1・2号墳の間の6号墳(6世紀中頃)が整備されており、1・2号墳の直径は25.5m、6号墳は12.5m、高さは1号墳2.5m、2号墳3.5m』となっている。
古墳とほぼ同じ高さに造られた展望台からは、北アルプスやその手前の山々が一望でき、またほぼ人頭大の石で構成された同古墳からは、「大室積石塚古墳群」とは違った壮大さを受

けた。
完成までにはどれだけの人数と、どれだけの月日を要したのだろう。
築造年代が相違する1号墳・2号墳・6号墳の被葬者たちには、いかなる関係性があり同じ場所に葬られたのであろうか？。
考え出すときりがない。
☆13：40　ぽつり、ぽつりと雨も落ちてきたので「八丁鎧塚古墳」を後にして、筑摩神社（松本市）へと向かう。
同古墳を出発してから数分後、待っていたかのように滝のような雨が降り始めたのには正直驚いた。
上信越自動車道（須坂長野東IC→更埴JCT）→長野自動車道（松本IC）→R158経由で筑摩神社へと向かう。

★16：20　筑摩神社到着（松本市筑摩）。
メンバーが松本市内の花屋で献花用の花束を造る。

飯塚神社（下）と後方の首塚

松本駅よりおよそ3km東に位置した筑摩神社境内の一角に惨殺された八面大王とその同士の首が葬られた飯塚神社があり、その後方に円墳状の首塚（鬼塚）がある。
全員で冥福を祈り献花する。
立看板の説明には『飯塚（鬼塚）の由来…魏石鬼を始め鬼が打ち滅ぼされた。
長たる者の首136を持って凱旋しこの地に塚を築いて葬り飯塚といい、後に鬼塚と呼ばれるようになった昭和十一年五月十七日建之』と書かれている。
ヤマトは信州の原住民を「土蜘蛛」とは呼ばず「鬼」と呼んで蔑視していたことが判明するのである。
全国的に鬼にまつわる地名（山・古墳）などが多々点在している。
長136名との文言から「八面大王」の軍勢は優に1,000名を超えていると推測される。
先人タケミナカタが築いていた太陽王国、同じく太陽王国を築いていた磐井の末裔として侵略者ヤマトへの帰順を潔しとせず徹底抗戦するも、武運つたなく敗北し「鬼」の汚名を着せられている。
だが「空中に浮遊していた鋼鉄のごとき物体にヤマトが放った矢が〝カーンと音がして跳ね返った〟」との伝承が残っている。
太陽神とコンタクトしていた「筑紫の君磐井」の末裔「八面大王」の最後を宇宙側が見届けると同時に、武力を正義とするヤマトを否定したのであった。
「鬼」が誰であるか、悪逆非道の限りを尽くした「ヤマトの血塗られた歴史」が証明している。
☆16：40　筑摩神社を出発、本日の宿泊地カンデオホテルズ茅野を目指す。
途中、夕映え染まる松本城の景色に誘われ、しばし立ち寄り観光客気分に浸る。

長野自動車道(松本IC→岡谷JCT)→中央自動車道(諏訪IC)→R20経由で宿泊先カンデオホテルズ茅野へ向かう。

9月9日(木)晴

☆諏訪市博物館　☆大鹿村中央構造線博物館＆露頭断面(溝口・北川・安康)

☆尖石縄文考古館

★9：00　夜中から朝方まで水たまりができる程の降雨に気落ちする。

だが、ホテルを出発する頃には天候も回復し快晴といっても過言ではない状況だ。

3日間連続で出発時刻になると天候が回復するという不思議な体験をした。

R16号経由で諏訪市博物館に向かう。

★9：05　諏訪市博物館に到着(諏訪市中洲)。

事前取材で同博物館におけるイナウ(削りかけ・削り花)の収蔵を確認し取材アポも取っていた。

団体名を告げると担当者がこられ別室に案内された。

早速、テーブルに置かれた削りかけ（削り花）の取材・撮影を開始する。

今までは棒状のスタイルがほとんどであったが斬新的な形状で1996年の製作である。

担当者の方は資料（茅野市史）を提示され削りかけ（削り花）等について丁寧に説明して下さった。

2階の考古資料室には井戸尻・新道・千鹿頭社・武居畑の各遺跡からの縄文前期から後期にかけての出土物が展示されていた。

注口土器（縄文後期）や武居畑（縄文前期）の土器には、アイヌ文様の基本形の一つである大きな“渦巻文”が装飾され特に印象的であった。

また廊下には“御柱祭り“に使用される雄・雌の曳き縄がトグロ状に展示されていた。

お礼を延べ諏訪市博物館を退館した。

☆10：00　R16→R152経由で山間部の伊那市・中央構造線溝口露頭へ向かう。

広かった道幅も徐々に狭まり、舗装はされてはいるが対向車とのすれ違いも難しく、きつい勾配のカーブが連続する杖突峠(1,247m)を登りつめると、ほどなく下りとなる。

上り同様、連続するカーブを下って行くと視界が開けて道幅も広くなる。

片倉館寄託縄文土器

千鹿頭社遺跡出土縄文土器

図9　削りかけ(上)
削り花(下)
館内展示土器他
（諏訪市博物館所蔵）

武居畑遺跡出土縄文土器

溝口露頭。構造線の左境界に沿って幅約4mの珪長質岩脈(マグマ)が貫入している

路脇に溝口露頭の看板を発見。

★11：00　中央構造線が露出している溝口露頭の駐車場に到着(伊那市長谷)。
入口には「美和ダム湖散策公園・中央構造線観察路入口」の標識がある
駐車場から案内に従って進むと中央構造線公園に散策路が整備されていた。
その散策路に沿って階段を降りると左手に美和ダム湖、そのダム湖に付き出した半島の斜面に溝口露頭が露出している。
斜面の左側(領家変成帯)は淡褐色の内帯(日本海側)の岩石、右側(三波川変成帯)は黒色グレーまたは濃緑色として見える外帯(太平洋側)の岩石で、中央構造線の地質境界が約45度に傾斜している。
この露頭では、地質境界に沿って珪長質岩脈の貫入が認められ、岩脈からは約1,500年前の放射年代(カリウム／アルゴン全岩年代)が得られている。

中央構造線は『まだ日本がアジア大陸の一部であったときに、大陸プレートの中に、当時の海溝と平行に生じた大きなずれ目(断層)であり、陸上の部分を1000km以上にも関東から九州まで続く日本で最長の構造線(地層の不連続部分である断層の一種)である。
どちらも地下深く、お互い遠く離れていたはずの岩石がいつどのようにして隣り合わせになったのか？解明されていない』のである。
地球が生み出す強烈なエネルギーの脈動に唯々驚嘆させられた。
☆11：15　溝口露頭を後にして、次の目的地である大鹿村・北川露頭へ向かう。

★11：40　R152を南下して北川露頭に到着(大鹿村鹿塩)。
駐車場から5分ほど下りて行くと露頭の案内板がある。
さらに下りていくと鹿塩川の流れが聞こえ、その響きで川の大きさを推定した。

北川露頭。右側の緑色系が三波川変成帯(外帯)、左側の赤褐色系が領家変成帯(内帯)

目的地は足場が悪く大きな石がそこかしこに転がっている。

川を背にすると高さ約5mの切り立った斜面に北川露頭が見えた。

先ほどの溝口露頭の表面は岩肌と分かるが、こちらの北川露頭の表面は岩石の砕けた状態として見えた。

左側は領家変性帯の淡褐色の破砕花崗岩、右側は三波変性帯の破砕緑色片岩である。

地質境界の上に風化した礫が覆い被さり境界面は確認しずらかったが、内帯と外帯の違いはクッキリと識別できた。

記念撮影後、北川露頭を後にする。

☆12：10　R152をさらに南下、大鹿村市街地の「道の駅歌舞伎の里大鹿」で昼食としばしの休息をとる。

その後、道の駅から約1,2ｋｍ南に位置した市街地の外れの「中央構造線博物館」へ向かう。

★13：15　「中央構造線博物館」に到着(大鹿村大河原)。

同博物館の前庭に並べられた様々な石のフィールド展示コーナーの「岩石園」が私たちを迎えてくれた。

この「岩石園」は、大鹿村内から集めた175点の大型岩石標本を、できるだけ実際の地質配列にあわせて配置しているという。

同博物館は中央構造線の真上に建てられているとか、大きな地震が発生したら「建物は大丈夫なのだろうか」そんなことが脳裏をよぎる。

館内では以下の資料の標本展示やパネルでの説明がなされていた。

・　先程取材してきた北川露頭から剥ぎ取っ

大鹿村中央構造線博物館(左)同館前庭の岩石園

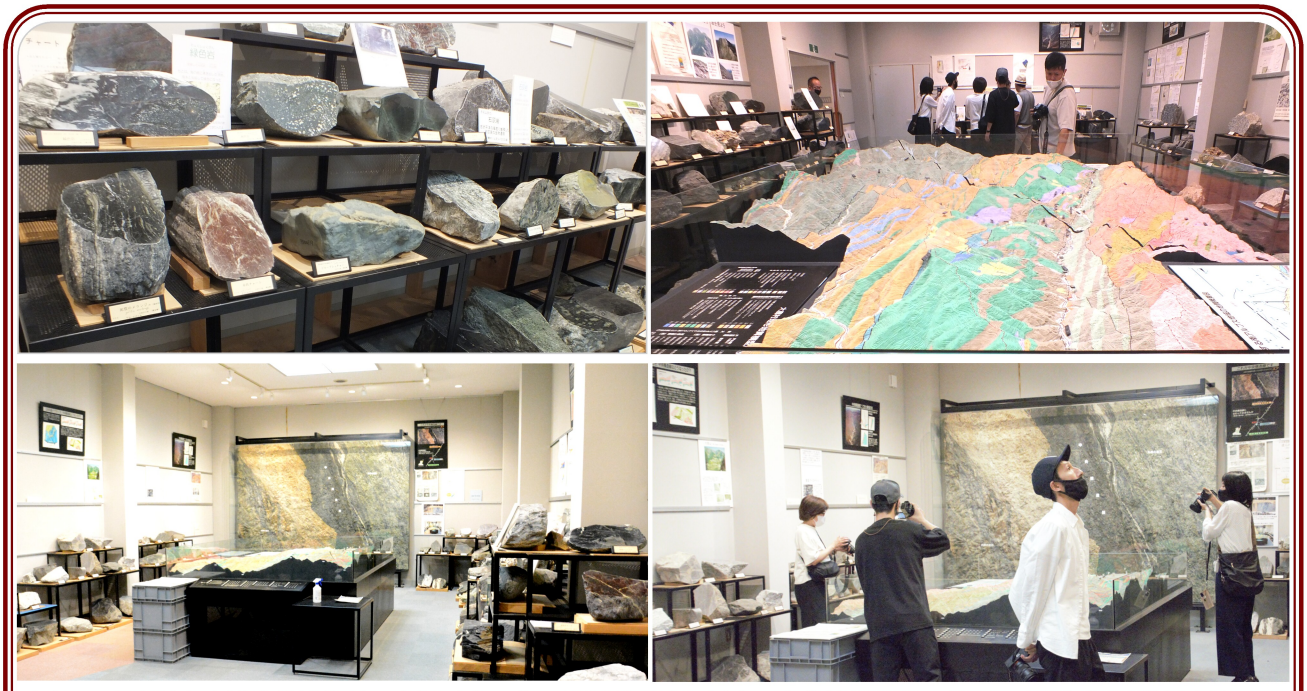


図10　大鹿村中央構造線博物館の各展示室。北口露頭剥ぎ取り標本、立体地質模型、岩石の大型切断研磨標本他
（大鹿村中央構造線博物館所蔵）

た実物標本

- 溝口露頭・北川露頭の岩石類や露頭の断面図
- 村内で採取した岩石の標本
- 地形地質立体模型
- 断層に関する各種資料

残念ながら学芸員の方が留守のため専門的なお話は聞くことはできなかった。

☆13：50　「中央構造線博物館」を後にする。

Ｒ152をさらに南下し同博物館から約9ｋｍ先の青木川沿いの「安康露頭」へと向かう。

徐々に道路幅が狭くなり視界の悪いカーブが連続する。

また青木川では所々で護岸工事が進行中で工事車両とすれ違うのも大変だ。

運転に最善の注意を払って進むと右側に目的地の看板が見えてきた。

★14：15　「安康露頭」に到着（大鹿村大河原安康）。

橋の手前の駐車場に車を停める。

「安康露頭」は、かなり勾配のきつい崖の下を流れる青木川の対岸の斜面に露出している。

撮影には足場の悪い垂直高低差20ｍ前後の崖を下りていかなければならない。

そこで、取材は若いスタッフ4名にお願いし他のスタッフは道路から状況を見守ることとした。

4名は安康沢に沿った幅約50cmの狭小な歩道を河原まで下り各自撮影ポイントを探す。

露頭面は青木川東側に幅約30ｍにわたり連続して露出しており、全景を撮影するのは容易ではない。

約20分後、対岸の「安康露頭」の撮影を終えて無事戻ってきた。

「安康露頭」の特徴は、左側の淡褐色の岩石である領家変性帯の中に2本の黒く変色した熱水変質帯が2例見られることである。

1,500万年頃の左横ずれの再活動期の終わりころに、断層に沿って熱水が上昇したことが原因であると考えられている。

地質境界としての中央構造線の内帯と外帯の岩石の境界は、溝口・北川露頭と比較すると判定しにくい面がある。

安康露頭

領家変成帯と三波川変成帯の岩石が直接接しています。
左側の淡褐色の岩石は領家変成帯の花崗岩がいろいろな深さでくりかえし変形を受けた破砕岸です。
部は淡緑色に変質していて、もとの岩が苦鉄質だった可能性があります。

右側の緑色の岩石は三波川変成帯の緑色岩または緑色片岩です。
その左端の黒色片状の岩石は泥質(黒色片岩)で、その左端が領家変成帯の岩石との境界です。

(大鹿村中央構造線博物館の説明文より)

☆14：40　R152をユーターンし「安康露頭」を後にする。
山裾が迫る左側には、大鹿村市街地に至るまで十数本の滝が視界に入りとても印象的だ。
同市街地からR22→R59→中央自動車道(松川IC→諏訪IC)→R152経由で「尖石縄文考古館」へ向かう。
到着時刻を逆算すると入館時間の最終(16：30)に間に合わない公算が大と考えられ、途中で多少遅れる旨連絡を入れる。

★16：50　渋滞に巻き込まれながら「尖石縄文考古館」に到着(茅野市豊平)。
約束の時刻を過ぎてしまったが快く受け入れて下さった。
同館では、八ヶ岳山麓・霧ヶ峰山麓にある縄文時代の遺跡から出土した土器・石器などの実物資料や縄文時代の生活や習俗・環境などについて展示している。
中でも「縄文のビーナス」・「仮面の女神」の土偶は国宝に指定されている。
「縄文のビーナス」が装着したヘルメット状の真上と両サイドの渦巻文及び「仮面の女神」の上半身(除く頭部)に装飾された同心円文及び変形同心円文と渦巻文は実に見応えがあった。
また、遺跡から出土したさまざまな遺物などを大小3つのブースに分けて展示し縄文ミュージアムショップや体験コーナーも併設している。
「縄文の王国」といわれる長野に相応しい見る者を圧倒せずにはおかない格調の高い考古資料館であった。
スタッフ全員ほぼ無言で撮影に没頭している

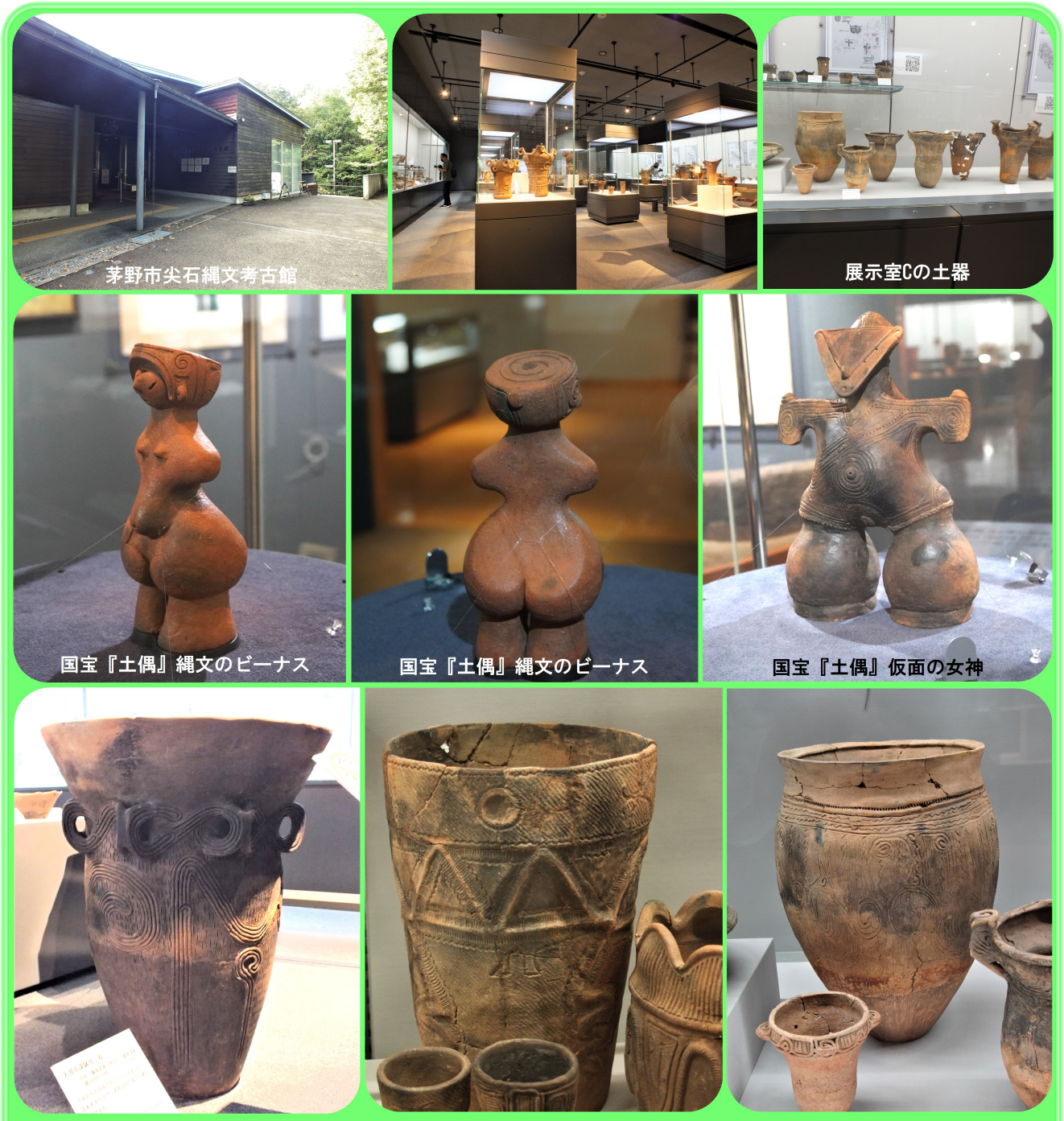


図11　茅野市内から出土の縄文土偶、縄文土器他　　（茅野市尖石縄文考古館所蔵）

が、既に閉館時刻の17：00は過ぎている。
考古館側の特別な配慮で閉館時刻を延長していただいた。
再度訪問したいと強く心に誓い、お礼を述べ取材を終了した。
☆17：20　「尖石縄文考古館」を後にした。
本日のスケジュールを全て終え、R152→中央自動車道（諏訪IC）→首都高速道路（駒形IC）経由で宿泊先の東京浅草を目指す。

★20：20　渋滞に巻き込まれながら休息をはさみ、延べ220ｋｍを約3時間で走破し宿泊先の浅草セントラルホテルに無事到着。

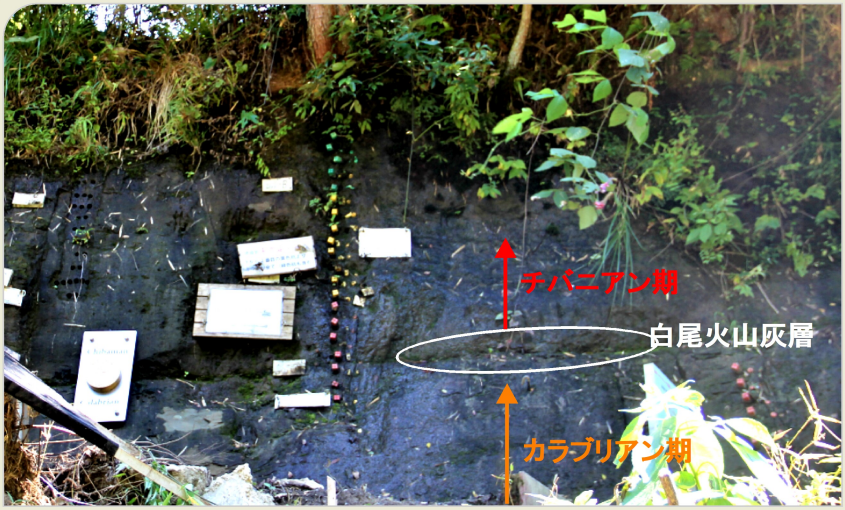
9月10日（金）晴天
☆チバニアンと認定された地磁気逆転地層・千葉県市原市田淵（チバニアンビジターセンター）
★9：00　浅草を出発。
首都高速道路（御徒町IC→川崎浮嶋JCT）→東京

湾アクアライン→首都圏中央連絡自動車道(市原鶴舞IC)→R168→R81経由でこの度の最終の取材先となる市原市田淵の地磁気逆転地層近くのチバニアンビジターセンターへと向かう。
首都高速道路を疾走する両側にはオフィスビルやマンションが林立している。
東京湾アクアライン手前の川崎市側には倉庫や工場、プラントなどが並んでいた。
アクアラインを通過して千葉県に入る。
東京の喧騒とは打って変わりのどかな景色が続く。
高速を下り一般道に入る。
道路は極めて細くなり対向車とすれ違うのも大変だ。

★11：20　約2時間半を費やしチバニアンビジターセンターへ到着(千葉県市原市田淵)。
ビジターセンターの駐車場に到着して最初に目を引いたのは「祝チバニアン(千葉時代)決定」の横断幕であった。
地磁気逆転地層が日本初のGSSPに認定されたことを祝して掲げている。
事前にお願いしていたガイド(女性)の方から現地に赴くにあたり「チバニアン」についての説明が始まる。
「チバニアンは見学が出来ないんですよ！
え？どうしてってなりますよね、なぜかと言うとチバニアンは時代の名前なので」と始まり「地球46億年の歴史の中で地球磁場のN極とS極が逆転していた時期がまれにあり、その痕跡が市原市田淵の養老川沿い崖面に見られるんですよ」と。
さらに説明が続き、ようやく養老川沿いの河原へと下っていく。
足元は整備されているが、勾配や数ヶ所の階段があり少し歩きずらさを感じる。
通常は10分圏内の道程というが、途中での説明もあり約20分を要した。
最後の階段を下りて行くと、川底に貝の化石が見え流れが綺麗な養老川に到着した。
その河原を左手に進むとほぼ垂直に切り立ったダークグレー色の露頭が続く。
露頭の表面は一見ザラザラとした泥土のようで、そこに赤(7本)、黄(8本)、緑(5本)の杭が打ち込まれ垂直に並んでいる。
説明によると「各色の杭は、地磁気測定用サンプルを採取した跡に打ち込まれたもので、緑は地磁気が現在と同じ北を示し、黄は正磁極と逆磁極の中間、赤は磁極が逆転していることを示しています」とのこと。
「※白尾火山灰層」を境に時代が変わり下層がカラブリアン期、上層がチバニアン期です」と、専門的な説明である。
その地点よりさらに奥の露頭面にもサンプル採取跡や杭が打ち込まれていた。
※赤の杭の下から3番目と4番目の間の水平に走るクラックの間には、約77,4万年前に長野県と岐阜県の境にあった「古期御嶽山」の噴火で堆積した「白尾火山灰層」がはさまれている。
これが時代境界の明白な目印となるなど、好条件が重なりチバニアン期の誕生につながった。

また、露頭には長方形のプレートの上にはGlo

チバニアンビジターセンター



「チバニアン」とはラテン語で〝千葉時代〟を意味する

令和2年1月17日、IUGS(国際地質科学連合)により、千葉県市原市田淵の地層が地質年代境界の「国際模式標準断面及び地点」或いは「国際協会模式層断面とポイント」(GSSP)として認定されたことにより、地質年代第四期の更新世中期である約77万4千年前～12万9千年前の時代に「チバニアン」という名称をつけることが決定された。

第四期という地質年代区分では、地磁気の逆転現象や気候変動が境界となっている。

田淵の地層は、このうち地磁気逆転現象がよく露頭に記録されていることや地層が観察しやすい場所にあり、地質年代の境界を地球上で最も良く示している。　(市原市ホームページより抜粋)

-bal Boundary Stratotype Section and Poi-nt【GSSP(国際境界模式層断面の地点)の認定を意味する金色のリベットが撃ち込まれていた。

「地磁気の逆転現象は、単に極の磁極が反転するのか、それとも地球の表面が回転する極移動(ポールシフト)なのか」とガイドの方に代表が質問した。

「磁極の反転であり、表面は回転しないでしょうからそんなに心配することはないのでは」との回答であった。

現在、地磁気が極端に減少し続けており、早ければ数十年以内の極移動の発生を指摘する学者もいる。

単なる磁極の反転現象で収まるのだろうか？

磁極の反転が安定するまで地球は不規則な表面回転を起こさないのだろうか？

最新のデータでは、地磁気の逆転は、過去360万年の間に15回発生している。

つまり、24万年に1回の頻度で磁極の反転が起こっていることになる。

前回の発生から既に約77万4千年が経過していることを考慮すると、磁極の反転が何時起こっても全く不思議ではないと考えられる。

私たちが喫緊に解明せねばならない重要な課題である。

チバニアン関連の取材をもって今回の全工程を終了した。

☆12：40　お礼を述べ、チバニアンビジターセンターを後にした。

★16：00　R81→R409→R410→東京湾アクアライン連絡道(袖ケ浦IC)→首都高速道路(大師IC)経由で昼食をはさみ東京羽田に到着、レンタカーを返却する。

★17：50－19：20

AIRDO AD0031便にて東京空港(17：50)を出発、新千歳空港(19：20)に無事到着。

到着ターミナルビルにて解散した。